



TITLE:

聚落に関する三新著

AUTHOR(S):

黒正, 巖

CITATION:

黒正, 巖. 聚落に関する三新著. 経済論叢 1927, 25(6): 1234-1240

ISSUE DATE:

1927-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128613>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷五十二第

行發日一月二十年二和昭

論叢

社會黨の農民獲得運動

法學博士

河田 嗣郎

租稅道義

法學博士

神戶 正雄

徳川時代に於ける長崎の支那貿易

文學博士

矢野 仁一

スミス「富國民論」の基礎的考察

法學士

石川 興二

文化現象の凝集作用

法學士

恒藤 恭

說苑

我が國の地方費國庫補助制度

經濟學士

中川與之助

雜錄

大名領地について

經濟學博士

本庄榮治郎

獨逸の租稅收入

經濟學博士

沙見 三郎

聚落に關する三新著

經濟學士

黑正 巖

法令

銀行法施行期日ノ件・銀行法ニ依ル地域指定ノ件・銀行法ニ依ル銀行ノ特例ニ關スル件・銀行法ニ依ル人口一萬未満ノ地ヲ定ムルノ件・銀行法施行細則

附錄

本誌第二十五卷總目錄

第一 小田内通敏氏 聚落と地理

小田内氏は人も知る如く我國聚落地理學界の大先輩である。

嘗て「帝都と近郊」なる名著を公けにして、學界の注目する所となり、爾來諸都市に於ける種々の調査はこの書の研究方法を用ふといふ程に大なる影響を及ぼしたものである。その後著者は早稲田慶應兩大學の講師として人文地理學を講ぜられ、又朝鮮總督府の囑託によつて朝鮮部落の調査を行ひ、已にその調査研究の一部は公けにされた。更に今回その研究なり主張なりをまとめて公刊せられた。「聚落と地理」は即ち之れであつて、全十八編より成る。

第一編の聚落と地理に於ては、聚落地理學の任務を述べ、西洋の概き直ほしの學問でなくて日本自身の研究を主張し、更に聚落の研究に於ては單に空間的觀察のみならず、常に歴史的發展的觀點に立つべきを力説してある。之は余の見解と同一にして、我國聚落の特殊性の研究は最も肝要の事である。余はこの主張は實に聚落地理のみに止らずして、我國一般の人文科學に於ても強く高調せらるべき事であると思ふ。又著者は我國に於て人文地理學の發達せざるを遺憾とし、その研究方法及び文獻の調査に多くの力を用ひて居る。その努力のあととは各編を通じて之を覗ふ事が出来る。文獻を檢索せんとする人々は先づこの書を繰かるべきであらう。

更に著者は文化發展の本源を聚落の中に見出さんとし、聚落榮耀の中にそれらの民族性、文化精神を把握せん事を旨とし

聚落に關する三新著

黑 正 巖

最近相前後して聚落研究に關する三つの著書が學界に贈られた。人文地理學の研究に乏しき我國にとつては誠に慶賀に耐えぬ所である。この三つの著書は何れも著者の個性をよく表現し、從てその内容は夫々全く異つた特色を有するものである。著書の批評の如きは極めて困難にして、容易に是非を論ずべきものでないから、余は單に讀了後の感想を述べ且つその内容の梗概を示して、同學の士の參考に供し度いと思ふ。

て居る。即ち第三編歐洲村落社會研究の地理學的傾向及び第十編日本の地方的特質と人口移動、第十二編朝鮮地方生活研究の意義の中に於て、この點が特に明白に主張してある。之は Meitzen の説を倣つて迄もなく、何人も是認する所である。いふ迄もなく聚落に於て各地方の文化の程度、經濟狀態等を一日して理解する事が出来る。併し我々は單に聚落に於て民族性なり、各地方の文化を見出しうるといふだけで済まされない。科學としての人文地理學は抽象論よりも先づ事象を現實に研究しなければならぬ。如何なる程度に文化が聚落に於て表現せられて居るかを研究する事が第一義であるから、我々斯學に志す者は先づこの點から發足すべく、單なる主張として了らしむべきではないと思ふ。第五編六編は武藏野の研究にして、かの「帝都と近郊」との副産物と思はれるが、氏の最も得意とせらるゝ聚落變化の過程が簡單にも明確に呈示せられ、之によつて舊著の足らざる所を補ひ、大都市の近郊村落の都市化の過程、生産形態の變化を知る事が出来よう。更に第七、八の兩編は村落の實地踏査記にして、調査に關する苦心、技術的方法等を通俗的に説述してある。後進者の葉とすべきものである。

第十編及十一編は地方的特質の研究即ち地方主義を高調せるものである。従て地域研究が地理學の根柢であるといふ。之はブローシュ氏の主張に基くものらしいが、之は正に我國に於ても力強く主張せらるべきである。著者のいふが如く、「日本の地方的特色は三百年來固定せられ、各地方が夫々特殊の地的、渾一をなして居る事が、凡ての社會現象に現はれて居る」の

は、何人も否み難い。中央集權制の確立されたる今日に於ても、仲々この地的渾一は崩れない。地方的特色を見出し、地的渾一を以て一定の地域を比較研究する事は、人文地理學の第一の任務とすべきである。從來の人文地理學の如く、個々の事象を抽出して、その地人相關の關係を研究するは、人文地理學の凡てではない。地域的研究こそ最も肝要なるに不拘、我國にはこの種の研究に乏しいのは著者と共に誠に歎すべき事である。又地域的研究は實際的方面よりいふも重大なる問題である。中央集權思想に囚はれたる日本人は、口には地方分權などといふが、實際には東京以外の地に日本はないかの如く考へ、地方の事には甚だ無關心である。従て地方的特色を知らない役人共は、遑々二無二西洋的施設を模倣して之を地方に實施するが故に、地方の實情とは全く木に竹を接いだやうな民政を行つて居る事が少くない。著者の言の如く明治初年に設置された地理局が長く存続して居たならば、地方事情もよく研究され、又地域的研究も隆興したに違ない。この方面の事柄が等閑視せられたのは誠に遺憾の事である。併し又一面に於て近來地方史誌の研究勃興の機運に向ひつゝあるが故に、聚落の研究は更なり、地域的研究によつて眞の意味に於ける人文地理學的研究も大に發展する事と思ふ。

要するに小田内氏の著書は部分的の特殊研究は少く、主として我國に於ける人文地理學殊に聚落研究の不振を歎じ、學者がこの方面に關心を有すべき事を主張し、又如何なる方法を用ふべきかを教ふるものである。著者の主張には全く同感である。

只我々が著者に望む所はこの主義主張に立脚して、日本自身の研究を具體的に研究し、以て我々の蒙を啓かれん事であり、又更に人文地理學の任務研究對象及び方法を一層理論的に指示せられん事である。尙ほ附言し度いのは朝鮮聚落の研究に於ては、朝鮮人の日常生活と密接の關係ある市場につきて地理學的考察を試みられん事である。——出版書肆古今書院、四六判三一〇頁、定價二圓三十錢——

第二 藤田元春氏 日本民家史

著者は苦學力行、精力そのものゝ如き感と與ふる熱心なる研究者にして、第三高等學校及び大阪高等學校に於て人文地理學の講義をなした、或は支那黃河流域の歴史地理的研究をなし、或は日本全國に行脚して民家の踏査を行ふ等、常にその熱心さに我々は敬服して居る。新著日本民家史はその多年研究の收獲であつて、從來この種の研究は多少發表せられて居り、殊に今和次郎氏の著者日本の民家の如きも學界の注目を惹いてゐたが、藤田氏の著書の如く歴史的地理的に、日本全國に亘て概觀せるものは、未だその比を見ないと思ふ。余も從來民家の研究に對しては深甚の興味を有し、殊に最近日本村落が急變をなした、あるを見て、一日も早く日本固有の村落及び民家の研究を企てたいと思ひ乍ら、公務及び他の研究に忙殺されて之を果す事が出来なかつた。この時に當つて藤田氏の著書を得たるは余の最も喜悅に耐えない次第である。

著者は小田内氏の如く聚落研究の必要とか或は方法とかに就

いてあれこれと議論を爲さずして、一直線に事實につきてことごとくと研究を斷行した。小田内氏もいへるが如く、村落は社會組織の原型であり、而して民家は村落の單位なるが故に、村落の研究は須く民家より初めねばならぬ。藤田氏は正に小田内氏の主張を默々として實行したのである。私は小田内氏と共に之を學界の慶事として喜び度い。藤田氏は元來人文地理學者にして、從て民家を地理學上より分布の概念に於て把握する事を旨とせられたるも、その前提として聚落の構成要素たる民家の史的發展を研究せられたのである。併し書中論述せらるゝ所は決して單なる史的觀察計りではなく、巧みに空間的分布的觀察と時間的發展的觀察とを交錯せしめ、又一々挿繪によつて説明を加へ、讀者をしてよく民家の歴史的地理的概念を理解せしむる。蓋し之は氏が徒らに抽象論を事とせずして、苟しくも文獻に徴し得ざるもの、又は自ら踏査せざるものにつきては、決して輕率なる獨斷をしなかつたからである。

本書は堂々六百頁の大著にして殆ど各頁に寫眞版を入れ、眼のあたり各種の民家を彷彿せしめて居る。第一編に於ては民家を最も明確に特徴づける所の屋根につきて檢討を試み、各種の屋根の構造とその變化を述べ、更にその地理的分布を明かにして居る。而して氏は小田内氏と同じく、民家の構造の内に於て民族性を見出さんとしてゐる事は之を所々に覗ふ事をうべく、例へば四阿の分布狀態よりして古代に於ける歸化朝鮮人の分布を論ぜんとするが如きは即ち之れである。又屋根に用ふる材料につきては一々その起原及び分布を觀察し、屋根によつて都鄙

の別をも明かにせんとした。

第二編に於ては民家の間取りを研究してある。屋根が千差萬別であると同じく、その間取も決して同一ではないが、併しある一定の村落又は地方につきて見れば、一定の規格に従つて居り、一定の地方色を形成して居る事は、藤田氏の研究によつて明かである。著者は間取につきても一々その歴史的發達とその地方的分布とを述べ、更にその屋根の形式との關係に於て觀察してある。著者は屋根の地理的分布の原因につきてはかなり種々の方面より説明しようとする努力せられて居るようであるが、間取が地方々々によつて差異を有する所以につきては餘り論及せられてゐないようである。屋根の如き外部に露はるゝものは自然的事情によつて制約せらるゝ事が大である事は容易に考へ得らるゝも、間取りも自然的事情に影響せらるゝと同時に、又その地方々々の生活様式更には經濟事情による事も少くはあるまい。個々の間取の描寫の外にこの點を一層研究せられん事を切望する。

第三編に於ては歷史上より家作の變化を觀察し、上古の家とその大さを文獻及び發掘物より考證し、更に奈良朝時代、平安朝時代、鎌倉室町時代の民家を叙して當時の民衆の生活狀態を闡明する事につとめ、次で江戸時代の民家の模様及び民家建築に對する制限、三間梁の由來等を詳述してある。第四編は民家の所在地たる宅地の研究にして之は各地方の經濟狀態を知る上に於ても極めて必要の事であると同時に、民家の本質を知る爲めには必ずこの研究をしなければならぬ。蓋し宅地の廣狹、分

配方法、その性質等によつて必然的に民家の形式、經濟生活の様式が變化するからである。更に附録として都城としての大坂、及び京都市内に殘存せる古代の聚落を收載す。殊に後者は我々京都に在住するものにとりては極めて興味あり、且つ種々の示唆を與ふるものにして、我々が無心に市の内外を散歩して毫も氣づかなかつたものが、氏の研究によつて歴史學的關心を喚起するようになった。

日本民家史全編を通じて、著者が如何に苦心せられたるかを視ひうると同時に、之によつて日本全國に於ける民家の分布狀態及びその態様を視ふ事が出来、今後この種の研究をなさんとするものは之を業として考察して行けば無用の徒勞をしなくともよいであらう。又その記す所は徒らなる概念論に流れず、事實の記述を旨とせられたるに拘はらず、尙ほ讀者の興味をそゝる事甚だ深く、人文地理學の研究者たらざる一般の人々にも極めて面白く讀みうる書物である。著者は地理的研究の前提として民家の歴史的觀念を把握する爲めに之を研究せられたのであり、又我々もこの研究を以て人文地理學者としての藤田氏の任務が完了せられたものとは思はない。從て、遠からずして民家を綜合的に觀察し、聚落地理學の對象として之を研究發表せらるゝ事と思ふ。尙ほ余の希望する所は、著者があれ程に間取につきても詳密に研究せられたのであるから、更に進んで、民家に附屬する倉庫の研究を進められん事である。民家の形式が地方的歴史に變化すると同時に、倉庫も亦種々の形相を以て現はれる。蓋し倉庫は人間が最も尊重し愛護するの手段として建造

せらるゝものであるから、人々は倉庫の建造に對しては極めて注意を拂ふからである。——出版書肆刀江書書院、菊判六百頁、圖版及び挿繪二百六十餘枚、定價八圓八拾錢——

第三 田村浩氏 琉球共產村落の研究

前の二者と全然異なる範疇に於て村落を研究せるものは即ち田村浩氏の琉球共產村落の研究である。氏の閱歷に關しては之を詳かにしないが、八田三郎博士の序文によれば、著者は琉球に役人として在勤せられ、その間に蒐集せる材料によつて、この大著を完成せられたといふことである。琉球の土地制度に就きては已に研究を發表せるもの必しも少しとせず、就中河上博士、故内田銀藏博士の論文、故仲吉朝助氏の研究——之は公刊せらるゝに至らなかつた——は最も注目すべきものであるが、本書の如く尠大にして一の體系をなせるものは、余の寡聞を以てすれば、未だ之を知らない。人類社會の發展過程を研究する上に於て、最初に述着する困難なる問題は、原始社會に於て如何なる社會組織の存在せしや、一定の文化發展の階段に於ては人類は必然的に原始共產制を有するやといふ事である。余もこの問題に關して少からぬ興味をもち、多少の研究を試み、昨午京都帝國大學夏期講演會に於ては難儀ながら、原始社會に於ける共產村落につきて講述した程である。されば余は田村氏の著書を一氣にして讀了せざるを得ない程に興味を覺えたのである。

第一章共產村落概論に於て先づ原始社會の構成を説き、英

國、獨逸、印度、ロシア、瓜哇等の共產村落を概説し、更に共產村落發生に關する學說として原始共有説、原始私貢納原因説、人種原因説、自然發達説を列舉檢討し、然る後、「人類進化の法則は民族を通じて單純一律に適用せらるべきに非ず、人類の社會相は或は自然的環境により生存の物的條件を異にし、或は人種異動に基き、或は行政的關係により、或は模倣による等幾多の複雑にして特異的なる外部的干渉に影響せられて之等が内的動機と絶えざる相關交渉によりて進化せるものといふを得べし」とて(二四頁)、社會組織の發展を一元的に説明する事に反對し、更に所有權の觀念が古代と近世とによつて全然異なるものとし、「氏族社會の土地共有の觀念を狹義に解するものとせば、近世法的思想たる共有權を意味すべきものに非ずして血族を基礎とする原始團體員は土地所有に對し明確なる觀念なくして自由に土地を先占使用し共用したるを意味するものといふべく、直ちに原始共有論者の論ずるが如く土地私有は共有に後れて發達するものなりと論ずるを得ざるべし」と、福田德三博士と稍同巧の説を述べ、琉球の祖神地若しくは祖地、祖田の例を擧げて論證し、之は「寧ろ原始的私有の基礎を明にせるものにして、原始共有論者は比較的文化的の進みたる農耕制度の下に行はるゝ共有事實を論據とするものにして原始的論證に欠ぐる所なり」と斷じ、從來の原始共產制論に反對せらるゝものゝ如くである。

著者の説によれば、琉球の共產村落は原始時代の門族共產體に淵源したるも西紀千二百六十二年英祖王の創意によつて共有

口分田の制が實施せられ、從てその人頭割地は貢租による人頭賦課と不可分の關係にありとし、更に慶長以後島津氏の支配力の優勢となるにつれ、門割制度に類似せる定期地割を行ひ、更に千九百三年以來土地私有制を確立して、ある一部の地方のみに共產制の行はるゝに至つたといふ。茲に於て著者は先づ門族組織の研究を試みた。その記す所は、我國上代の氏族制度の類推物として誠に注目に値ひするものである。又共產村落發生の根本的萌芽としての門中及び根神の體制を明にし、アマミキヨ族の詳細なる考證によつて琉球國家建設の模様を述べて居る。之等の研究は曖昧模糊たる我國古代の社會體制を考察する上に多大の示唆を與ふるものである。

次に共產村落の發展形式及び過程につきては、古代期村落發生の地點は城 *Gusiku* を以て代表的形態となつ、*Gusiku* は古代村落發生前の集團部落にして、「村」又は「城」を意味するものとした。中世期の村落には二種ありて、一は古代期の村落より轉化せる門中氏族が土着の最も古き一門を構成し、其の門族より支分せられて村落の發生したるものにして、二は門中支族の増加に従ひ先住地たる丘陵を去りて平原に發展し田耕を行ひ村落を構成せるものである。近世の村落は、舊藩時代に藩廳の命令により増加せる士族を原野又は海邊に強制的に團體移住をなさしめたる事即ち屋取に基くもの、村建又は村移しと稱する既存部落の全部的又は一部の強制移住に基くもの、一門若しくは支門中が任意又は公認に由り既存部落に個別的移住を爲せるもの、之である。而て土着門中を以て組織せる部落に個別的に移

住せるは極めて最近の事にして、之は個別的自由移轉が一村の共同責任に影響を及ぼすからであるといふ。

更に各地方の村落發生の事情を各村落につきて個別詳細に記述し且つその村落内部に於ける社會組織經濟組織等を一々説明してある。第三章に於ては琉球の土地共有制を研究し、土地共有制の下に一般に行はる耕地配分法たる定期地割の起源に筆を起してある。琉球の定期地割の起源に關しては定説はないのであるが、著者は定期地割を以て慶長檢地以後のものなりとし、その以前に於ては英祖王の時代より井田法が行はれたと述べ、耕地班田制と定期地割制とを共同耕作の一種とし、諸國村落共產體にありては、後者が文化の進みたる階段に於て前者より生ずべき制度なりとせらるゝも、之につきては議論の餘地あるのみならず、概念上の混同なきやを疑はざるを得ぬ。更に同章第三節に於ては藩政時代の定期地割を論じ、地割の方法等を詳細に説明してある。

第四章は共同貢租制を論じてあるが、この共同貢租制は本土各藩の夫れと殆ど異なる所がないから、之は必しも共產村落特有のものといふ事は出来ない。第五章は共同經濟的施設を研究し、模合及び寄り、共同決算、簡荒貯蓄を掲げて居る。併し之等の事例も徳川時代には一般に本土に於て行はれたる所に於て、琉球の共產村落のみに限らるゝものではない。尙ほ注意すべきは第四節の共同耕作の條である。著者は共同耕作を如何なる意味に解せられたるかは知らぬが、氏の文章を見ると、共有地を團體員が共同に耕作せしかに解せられて居るようである。

如何なる土地共有制の下に於ても、かくの如き意味の共同耕作の行はれたる所は余の寡聞を以てすれば殆ど之を見ない。各戸が獨立して耕作し、只租税その他につきて連帶責任を有するにすぎぬ場合が多いのである。若し琉球に於てかくの如き共同耕作が行はれたとすれば誠に例外的の面白い現象である。併し乍ら著者がその論據として示さるゝ諸村公事帳の文言によれば、割地を受けたるものが何等かの事故によつて耕作し得ざる場合に、村民が惣作をなして租税を代納したものゝ如くである。故にこの場合に於ては特に共同耕作の意味を明白に定義して行論せらるゝの必要があると思ふ。第六章は共產村落の統制と目すべき内法につきて詳説してあるが、内法には必しも共產制に固有のものでない規定も記されてあつて、徳川時代の五人組法の如き性質のものが多くようである。

本書は土地共有制が文化史上に於て如何なる地位を有するかを論ずる上に有力なる資料を提供しうる事は、余の疑はざる所であるが、本書を読み行く間に論理上の齟齬に非ずやと思はるゝ箇所もあり、又文意の明かならざるものがあつて、著者の真意を充分に理解する事の出来なかつた場合が少くなかつたのは余の甚だ遺憾とする所である。併し之は恐らく余の不才の致す所であり又一氣呵成に讀了した結果であらう。尙ほこの機會に於て故沖吉朝助氏は多年琉球の土地制度を研究せられ乍ら、終にその稿を公刊するに至らずして逝去せられたる事に對し、衷心より哀悼の意を表し度い。仲吉氏も本著が代つて世に出たので地下によるこんで居られる事と思ふ。——出版書肆岡書